

Title	スポーツの政治的利用：ベルリンオリンピックを中心として
Sub Title	Japan faces Germany : the politics of the 1936 Olympics
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1992
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.65, No.2 (1992. 2) ,p.9- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	神谷不二教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19920228-0009">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19920228-0009</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## スポーツの政治的利用

——ベルリンオリンピックを中心として——

はじめに

一、ドイツ側の準備

二、日本の対応——選手と関係者

三、日本の対応——マスメディアのオリンピック報道

(1) ラジオ

(2) 新聞

(3) 雑誌

結び

はじめに

スポーツが盛んになるにつれて、政治に果す役割も増大してきた。

池  
井  
優

スポーツが政治に持つ役割の第一は、ナショナリズムの高揚である。特に国際大会における自国選手の活躍は、国民を熱狂させる。一九四七年から一九九年にかけて「フジヤマノトビウオ」古橋廣之進が四〇〇メートル、八〇〇メートル、一五〇〇メートルの自由形競泳で、次々と世界新記録を打ちたたてたことは、敗戦で打ちひしがれた日本人に大きな希望を与えた。だが当時日本は占領軍の統治下にあり、国際水泳連盟から除名されていたため、公式記録と認められず、幻の世界新にとどまった。

一九四八年、ロンドンで戦後初のオリンピックが開催されたが、日本とドイツは「戦犯」の烙印を押され、参加を許されなかった。日本水泳競技連盟が考えたのは、ロンドンオリンピックと同じ日に、神宮プールで日本選手権大会を開催するという名案であった。大会のプログラムには田畑政治会長が「日本水泳界の真価を世界に示そう」と次のような文を書き、選手の奮起を促した。

本大会に出場する選手諸君は、日本を代表しロンドン・オリンピックに出場する意気込みで大いにがんばってほしい。いうまでもなくオリンピック大会は世界選手権大会を兼ねており、もし諸君の記録がロンドン大会の記録を上回るものであるならば、オリンピック・チャンピオンは実質的にはワールド・チャンピオンたるの榮譽に値しないことになる。すなわち、ワールド・チャンピオンはオリンピック優勝者にあらずして、日本選手権大会の優勝者であるということになるのだ。

こうしてロンドンのオリンピックと同時期に行われた日本選手権大会で、古橋と同窓の日大の橋爪四郎が二人揃って一五〇〇メートル自由形で世界記録を二〇秒以上も短縮。四〇〇メートル自由形でも古橋が世界新を記録し、共にロンドンオリンピックの記録を大きく上回ったのだった。

昭和二四年六月、日本水泳連盟は国際水連に復帰を認められ、日本水泳代表団の一行はロサンゼルスで開催される全米水泳選手権大会に出場。一九三二年のロサンゼルスオリンピックの時金メダル五個を獲得した同じプールで、敗戦国日本の選手はアメリカに対抗して好成績をあげ、特に一五〇〇メートル決勝では、古橋、橋爪、田中純夫の日本

選手が、一、二、三位を独占。また二〇〇メートル、四〇〇メートル、さらに八〇〇メートルリレーでも日本チームは世界新記録を出して完勝した。

日本の新聞は号外を発行、ラジオは臨時ニュースを流すなど、日本国民は戦争では負けたがスポーツで勝ったうれしさを爆発させたのであった。

ナショナルリズムの高揚は中国の卓球、ワールドカップにおけるサッカー優勝チームの所属国、さらにはオリンピックにおけるメダル獲得など随所に発揮される。

スポーツの政治に果す役割の第二は、国際社会における宣伝と正当性の認知がスポーツを通じて見られることである。戦前においては本稿においてとりあげる一九三六年のベルリンオリンピックをドイツはナチスの栄光を誇示する手段として十二分に活用した。<sup>(2)</sup> オリンピック史上初めてアジアで行われた一九六四年の東京大会は、敗戦国日本がいかに復活し豊かになったかを世界に示す絶好のチャンスであったし、また一九八八年のオリンピックをソウルに招致すべく名古屋と争った八一年の国際オリンピック委員会(IOC)総会に、韓国は多数の関係者を総会の開催地西ドイツに送り、名古屋に大差をつけて開催地の権利を獲得。「バーデンバーデンの奇跡」といわれた。名古屋対ソウルの争いではなく、名古屋対韓国の争いだといわれたが、分裂国家の一方で「平和の祭典」を開くことの意義を韓国の関係者でIOC委員に熱心に説いてまわった結果であった。<sup>(3)</sup>

ソ連・中国・東欧諸国など韓国を承認していなかった国々も選手団を派遣。韓国の安定と急成長ぶりを世界各国に宣伝し、北朝鮮への優位を示す最高の機会となったのである。

スポーツの政治に果す役割の第三は、外交の手段としての効用である。ソ連が外交政策のひとつとしてスポーツを使っていることは一九五八年の『プラウダ』にもはっきりと述べられている。

わがソ連の重要な外交の要因のひとつは、スポーツマンの国際交流である。世界各国とスポーツマンの国流を成功させることは

資本主義国に対する絶好の宣伝となる。海外におけるソ連スポーツマンの成功は、外交団、貿易代表団の仕事を補佐する効果を持つのだ。<sup>(4)</sup>

アメリカも露骨にスポーツを外交の手段に使っている。一九七七年初頭、米国はキューバとの関係を正常化する第一歩として、バスケットボールチームをキューバの首都ハバナに派遣することになった。全米オールスターを送り大勝してキューバにメンツを失わせるのはまずいという配慮から、やや力の落ちるサウスダコタのチームを送り、キューバはこの「米国代表」チームを破り、観客は「米国をやっつけた」と熱狂し、地元紙は「キューバ、米国を破る」と大見出しで伝えたのだ。<sup>(5)</sup>

中国がピンポンを米中接近の道具に使ったことはよく知られている。<sup>(6)</sup> 大統領就任以来米中関係改善を模索していたニクソン大統領とキッシンジャー補佐官は、改善のためのシグナルを議会の演説、記者団への談話、中国製品の米国内持込みの許可、パキスタン、ルーマニアなど第三国を通じるルート等々を通じて、陰に陽に北京に送り続けたが、その答えが卓球によってもたらされた。ニクソン元大統領は回顧録の中で次のように書き残している。

（一九七一年）四月六日、突破口が全く予期していなかった方法で開かれた。日本で開かれていた世界選手権に参加中のアメリカ卓球チームが、模範試合をやるため中華人民共和国に招待されたとの知らせを東京のアメリカ大使館が送ってきたのである。私はこの知らせを喜ぶと同時にびっくりした。対中和解が卓球チームの訪中という形で達成されるとは、全く予想していなかったからである。私は直ちに招待の受諾を承認した。中国側もまたアメリカ・チームの訪中を取材するため、数人の西側記者に入国ビザを発給し、これに呼応した。<sup>(7)</sup>

このピンポンに始まる米中直接交流が、キッシンジャーの北京秘密訪問、ニクソン訪中、さらに米中正常化につながったことは記憶に新しい。

スポーツが政治に果す役割の第四は、政治のスポーツへの介入が露骨に見られるようになったことである。その典型的な例は一九八〇年のモスクワオリンピックを前にして、ソ連がアフガニスタンに軍事介入を行ったことに對し、

アメリカはアフガニスタンからのソ連軍の撤退を求めてモスクワ大会のボイコットをよびかけ、日本、西ドイツなど六ヶ国が不参加を表明した。ソ連は報復として四年後にロサンゼルスで行われた大会に派遣する選手、役員などの安全が保証されないことを理由に、東ドイツなど東欧諸国と共に不参加を決定。近代オリンピックの創始者、クーベルタンの名言「オリンピックは勝つことより参加することに意義がある」ならぬ「オリンピックは参加しないことに政治的意義を見出す」憂うべき状況が生じたのである。<sup>(8)</sup>

本稿はスポーツ、特にオリンピックを政治的に活用した最初の例として一九三六年に行われたベルリン大会について分析し、特に日本がどのように政治的利用にこまぬか分析するものである。

- (1) 古橋廣之進『熱き水しづきにーとびうおの「航跡」』(一九八六年、東京新聞出版局)九二ページ。
- (2) ベルリンオリンピックについてリチャード・マンデル、田島直人訳『ナチ・オリンピック』(一九七六年、ベースボールド・マガジン社)、ダフ・ハート・デイヴィス、岸本完司訳『ヒトラーへの聖火ーベルリン・オリンピック』(一九八八年、東京書籍)が詳しい。
- (3) ソウルオリンピックについては、金雲龍『偉大なるオリンピックーバーデンバーデンからソウルへ』(一九八九年、ベール・マガジン社)、藤原健固『ソウル・オリンピックの政治学』(『国際問題』三四二号、一九八八年九月所収)。
- (4) Richard Espy "The Politics of the Olympic Games", London, 1981, p. 4.
- (5) *Ibid.*, p. 6.
- (6) ビンボン外交については、錢江、神崎勇夫訳、中島宏解説『米中外交秘録ービンボン外交始末記』(一九八八年、東方書店)が中国側からの分析が詳細である。日本の動向については渡辺邦雄『ビンボン外交と私』(朝日新聞社編『朝日新聞記者の証言・第二巻ースポーツ記者の視座』、一九八〇年、朝日ソノラマ所収)。
- (7) リチャード・ニクソン、松尾文夫他訳『ニクソン回顧録・第一巻ー栄光の日々』(一九八八年、小学館)三二二ページ。
- (8) モスクワオリンピックの政治的側面について Derick L. Hulme Jr. "The Political Olympics-Moscow, Afghanistan, and the 1980 U.S. Boycott," 1990, New York. 清川正二『スポーツと政治ーオリンピックとボイコットの視点』(一九八七年、ベール・マガジン社)の第五章「池井優」モスクワオリンピック、ボイコットの政治過程」(『慶應義塾創立一二五年記念

論文集・法学部政治学関係「一九八三年、所収」。

### 一、ドイツ側の準備

第一一回オリンピック夏季大会のベルリン開催が決定したのは、一九三二年のことであった。かつてドイツはオリンピック開催の機会を一度失っていた。一九一六年の大会がベルリンに決定していたのだが、第一次大戦の勃発のため中止になったのである。関係者は再び到来したチャンスに準備を開始したが、当日日の出の勢いでドイツ国内に勢力をのばしつつあったナチス、特にヒットラーは、オリンピックについては消極的であった。一九三二年、政権を奪取する前のヒットラーはオリンピックを「ユダヤ人とフリーメイソンの発明」とみなし、「ユダヤ主義に汚れた芝居など、国家社会主義の支配するドイツでは上演できないだろう」と非難していた。<sup>(1)</sup>だが政権を獲得したヒットラーは、ナチスの全国スポーツ指導者ハンス・フォン・オステンと宣伝大臣ゲッペルス<sup>(2)</sup>の働きかけによって、オリンピックを政治的に利用することを考え始めた。そしてある秋の一日で事情は一変した。ヒットラーは関係者と会場予定地のグリュエヴァルトを訪れた。改修前、改修後のスタジアムの模型を見せられたヒットラーは、工事中のフィールドに降りた。労働者が地面を掘り起こす作業に汗を流している。いったい何をしているのかと彼は質問した。関係者がベルリン競馬協会との契約で視界をさえぎらないことになっているので、現在のスタジアムを掘り起こすしかないのだと答えた。ヒットラーは、「競馬場は必要なのか。必要でなければ競馬場が出ていけばよい」といい切り、グリュエヴァルトの敷地は全部新しいスポーツ敷設にあげわたし、現在の競技場をとりこわして一〇万人収容の新しい競技場をその跡地に建てようと速断したのだ<sup>(3)</sup>。

ヒットラーの決断によって、ベルリンオリンピックの準備は一変した。大統領の責任により国家的な事業となったの



会」の大文字を印刷することが要請された。<sup>(5)</sup>

こうした派手な準備と宣伝の裏で、ナチスはユダヤ人を迫害していった。大規模な反ユダヤ行動は一九三三年四月一日に発生した。ヒットラーに絶対の忠誠を誓う突撃隊がユダヤ人商店とユダヤ人のオフィスに対し、二日間の бойコットを強制したのである。国外の激しい反発によってその試みは成功しなかったが、それから一週間後の四月七日「非アーリア条項」が法制化され、ユダヤ人の公職追放が可能になった。公務員、判事、弁護士、さらには芸術家、ジャーナリスト、医師まで追放の範囲が広がり、彼らは権利や役職をユダヤ人というだけで自動的に奪われることになったのである。やがて全国に反ユダヤのスローガンが揚げられ、「ユダヤ人お断り」「ユダヤ人は招かれざる客」などと書かれた看板、ポスターがあふれ、ユダヤ人はスポーツクラブなどからも次々としめ出されていった。また反ユダヤ人の動きは、共産主義者、カトリック教徒、フリーメイソンなどに拡大され、法の手続きによらず無期限に拘留することを合法化する「緊急法令」が布告された。

こうした動きは、外国の反発を呼んだ。特にユダヤ系住民の多いニューヨークでは、集会がもたれ、元ニューヨーク州知事アルフレッド・スミス、ニューヨーク市長ラガーディアなどが次々と演壇に立ち、ヒットラーとその政権を糾弾した。当然そうした動きは、ベルリンオリンピックを бойコットすべしとの動きにつながっていった。当時アメリカオリンピック協会の会長であり、アメリカオリンピック委員会の委員長をも兼ねていたアベリー・ブランドーは、「ナチスはオリンピックには全く干渉しておらず、オリンピックは全く公平な国際的な運営のもとにおかれ、差別は一切しないというオリンピックの基本原則が守られている」と説明しても、なかなか理解が得られなかった。ブランドーは一度辞任した体育協会の会長に再び立候補した。後任候補がベルリンオリンピック参加反対を唱えていることを知ったからである。当選を果したブランドーは、「オリンピック運動の人種、宗教による差別を一切しないとの原則を、ナチの首都であるベルリンで示すことは、ナチスの誇るアリアン民族以外の多数の選手が優勝するチ

ヤンスをつくることであり、これは逆に反ナチ勢力の運動の助けになるのだ」と主張。ようやくアメリカの参加にこぎつけたのである。<sup>(6)</sup>

アメリカの参加は、ドイツ、特にヒットラーを喜ばせた。当時ベルリンに駐在していたイギリスの大使フィリップスは、次のような報告をロンドンに送っていた。

「総統はオリンピックに大いに関心を寄せている。……実際に彼は政治的な問題をもっぱらオリンピックへの影響という観点から見なおそうとしている。……ドイツ政府はユダヤ人への圧力を理由に米国がチームの派遣を見あわせれば、ようやく盛りあげた祝典の重大な宣伝価値がだいなしになることをひらすら危惧している。」<sup>(7)</sup>

国際世論、特にアメリカの反ナチス感情をこれ以上刺激しないため、オリンピック開催中は人目につくところから反ユダヤの立て看板を除去し、ユダヤ人選手を一時的にはあるが、ドイツチームの一員に加えることさえ行つたのである。

ドイツの日本への呼びかけは大会の二年半も前から熱心に行われた。一九三四年二月二日、駐日ドイツ大使デュリユクゼンは、次のような書簡を広田弘毅外相に送っている。

独逸政府ハ「オリンピック」競技ヲ以テ各国青年相互間ニ理解ト尊敬ノ念トヲ喚起スルニ足ル最モ重要ナル催ノ一ナリト思考スルヲ以テ全力ヲ尽シテ之カ遂行ヲ助成スルコトヲ其ノ任務ト致候。

仍テ日本側ニ於テモ招請ヲ受諾セラレ一九三六年ノ両大会ヲ出来得ル限り多数ノ参加アランコトヲ切ニ希望致候。

一九三四年二月二日<sup>(8)</sup>

広田外相は直ちに「欣然トシテ参加スル」旨返信を送ったのであった。<sup>(9)</sup>

ドイツ側は選手村の設営についても、特に気を配り、フィンランドの選手にはサウナ風呂、日本人には綿布団と日本式の風呂呂まで用意し、各国の生活習慣に対応したサービスを提供した。特に日本に対しては極めて好意的でほとんどの国が承認していなかった「満州国」を独立国とした地図を日本の関係者の前では掲げるなどの気配りを見せた。

もちろんオリンピック関係者は知る由もなかったが、折から日独間には防共協定の締結についての極秘交渉が進行中であり、日本を特に意識してのサービスも国策の反映であったのかもしれない。

- (1) ダフ・ハート・デイヴィス、岸本完司訳『ヒトラーへの聖火—ベルリン・オリンピック』(一九八八年、東京書籍)一四ページ。
- (2) ゲッベルスについては平井正『ゲッベルス—メディア時代の政治宣伝』(中公新書)一九九一年、中央公論社、カート・レイス、西城信訳『ゲッベルス—ヒトラー帝国の演出者』(一九七一年、図書出版社)、草森伸一『絶対の宣伝(1)、宣伝的人間の研究—ゲッベルス』(一九七八年、番町書房)。
- (3) デイヴィス前掲書一五ページ。
- (4) 鈴木良徳『オリンピック余聞』(一九八三年、ベースボール・マガジン社)三六—三八ページ。
- (5) 鉄道省国際観光局『第一一回オリンピック大会調査資料』(一九三六年、非売品)(外務省外交史料館蔵)。
- (6) アペリー・ブランデー、宮川毅訳『近代オリンピックの遺産』(一九七五年、ベースボール・マガジン社)一六七ページ。
- (7) デイヴィス前掲書三〇ページ。
- (8) 外務省外交史料館文書『国際「オリンピック」競技大会一件』。
- (9) 同右文書。

## 二、日本の対応—選手と関係者

さて、ドイツ側の万全の準備に対し、日本側はどう対応しようとしたのであろうか。

ベルリンオリンピックに参加するにあたり日本は二つの大きな目標を持っていた。第一は四年前のロサンゼルスオリンピックであげた成果を上回ることである。一九三二年、アメリカのロサンゼルスを舞台に行われた第一〇回オリンピック夏季大会で、日本は「アジアの強国」をメダルを通じて世界に印象づけた。陸上競技の三段跳びで南部忠平、

馬術競技で西竹一、水泳競技では一〇〇メートル自由形、一五〇〇メートル自由形、一〇〇メートル背泳、二〇〇メートル平泳ぎ、男子八〇〇メートルリレーで合計七個の金メダルを獲得。また銀メダル七、銅メダル四、他に六位までの入賞者一八と「スポーツ日本」の存在をアピールし国民のナショナルリズムを高め、満州事変以後悪化した日米関係の改善にも大きく貢献したのであった。したがって今回のベルリン大会は、少なくともロサンゼルスを上回る成績をあげなくてはならなかった。各競技団体はそれぞれロサンゼルス以後強化に乗り出したが、陸上競技連盟は八年計画をたて、それを表現した標語を募集した。「目指せ王座、陸上日本」が一等当選。「勝てよ、勝たせよ、陸上日本」が第二席であった。<sup>(1)</sup> また日本国内の優秀選手を国際的な場で競わせねばならないという方針により、極東選手権大会への参加、アメリカ、ドイツの選手を招いての日米対抗、日独対抗競技大会の開催、積極的な海外遠征などを行っていった。

前回好成绩をあげた水泳は、責任者松沢一鶴の言葉を借りると、「万一伯林大会に於て覇権の保持が不可能の場合には羅府大会に於ける輝しい記録は一朝の僥倖として看過され、将来の水上市日本の行路に幾多の暗影を投ぜられることは勿論であつたらう。水上日本再制覇こそ、日本水上競技聯盟の必死の計画であり、念願であり、目標であつた」と<sup>(2)</sup>いう。陸上、水上を筆頭に、ボート、サッカー、ホッケー、バスケット、体操、馬術、ボクシング、レスリング、ヨットの諸競技連盟も、ベルリン大会で好成绩を残すべく強化にとりこんでいた。

日本の第二の目標はベルリン大会開始直前に決定した四年後の第一二回大会を東京で行うについて、その先例としてベルリンの一回大会を観察し、良い点は吸収し、不備な点はこれを是正する心構えで参加した<sup>(3)</sup>ことである。代表団团长としてベルリンに赴いた平沼亮三は、帰国後の歓迎報告会で次のように挨拶している。

「兎に角(十二回大会)がこの東京に招致されました、私共の責任は非常な重大さを加へたことゝ存するのでございます。殊にドイツが非常に雄大壮麗なるあの競技場を造つたその後で日本でやるのは困るぢやないかといふやうなことも聞きますが、また日

本は日本の目的がありますので、何でも彼でもドイツの真似をしなければならぬといふこともないと思ひます。たゞ私共がどうしてもドイツの真似をしなければならぬと思ひますことは、ドイツが今回の大会に当りましてあの好結果を得たといふことは全くドイツの上下を挙げまして、殊に軍部の如き非常に尽力斡旋致しましてこのオリンピック競技の事業を援けたのであります。

これは日本に於きまして吾々のやうな体育協会の関係者とか、或はスポーツの關係の者だけが致すべきものでもなく、また出来ずものでもありません。全くこれはドイツのやうに國を挙げて官民が一体となつてやらなければならぬことと存じます。<sup>(4)</sup>

一九三六年は行動派の青年将校が兵を率いて、首相、陸相官邸などを襲い、蔵相高橋是清、内大臣齋藤実、教育総監渡辺錠太郎を殺害、國家改造を要求した二・二六事件が勃発した年であり、七月にはスペインの内乱が開始され、国内的にも、海外においても物情騒然たる中のオリンピック大会の開催であつた。

こうした状況を反映し、六月二〇日の出発当日も七時四五分、選手一同明治神宮に参拝、神のご加護を祈り、「聖戦を誓つて神前に額突き」、明治神宮から宮城前広場へと移り、二重橋前に整列。宮城遥拝、国歌斉唱、万歳三唱の後、東京駅まで約二五分行進。沿道、駅頭を埋め尽した人々の万歳、万歳の声に送られながら東京駅から乗車。

下関から船に乗り換え、当時日本の植民地であつた朝鮮半島の釜山で再び汽車に乗り、新京、ハルビン、満州里を経、シベリア鉄道で約一週間の旅をして七月三日、ベルリンに到着した。特に意図したかどうかは明らかでないが、選手団は日本の統治下にあつた朝鮮半島、満州を通過しナショナリズムの高揚を促したのである。この間、選手・役員一行は、朝鮮体育協会及び京城市主催による午餐会に出席、奉天に向い日本の傀儡國家であつた「満州國」の体育協会の有志の出迎えを受け、満鉄社員俱樂部で昼食。日露戦争、満州事変で命を失つた人々を偲ぶ忠靈塔参拝。奉天國際競技場で練習。新京では植田閑東軍司令官の激励を受け、ハルビンを通加する時には、役員の間にも満州派遣部隊に慰問金を贈呈しようとの決議が起り、团长以下一四円を集めて献金。満州里でモスクワ直行の列車に乗り換えた。その際ソ連税関の検査の手際の悪さと厳重さに、選手にいらだちの色が見えて、中にはおこりだす者さえいた。<sup>(5)</sup>

ソ連を走るシベリア鉄道の時間の不規則さ、食事のまずさなどに辟易とした選手達は、ベルリンに到着すると、ソ連とドイツの設備の違い、豊かさの差を改めて認識したのであった。

日本選手は期待に堪えて活躍した。三段跳びは田島直人が世界新記録で優勝、マラソンでは二四年目にして悲願達成の金メダルを朝鮮半島出身の孫選手が獲得。五〇〇メートル、一万メートル決勝ではフィンランドの強豪相手に村社が健闘よく四位となり、水泳は一〇〇メートル自由形で不覚をとったものの八〇〇メートルリレー、一五〇〇メートル自由形、二〇〇メートル平泳ぎに一位を占め、二〇〇メートル平泳ぎで日本女子として前畑がオリンピック初優勝、金六個、銀四個、銅八個のメダルを獲得。日本の力を世界に示したのであった。

- (1) 日本体育協会『第一回オリンピック大会報告書』(一九三七年、非売品)、一二四ページ。
- (2) 松沢一鶴「水上競技総評」(同右報告書、二三六ページ)。
- (3) 一九四〇年の東京オリンピックについては、池井優「一九四〇年「東京オリンピック」―招致から返上まで」(入江昭、有賀貞編『戦間期の日本外交』、一九八八年、東京大学出版会所収)。
- (4) 前掲報告書三ページ。
- (5) 同右報告書五六ページ。

### 三、日本の対応―マスメディアのオリンピック報道

#### (1) ラジオ

日本選手のベルリンにおける活躍を報道すべく、日本のメディアは万全の体制をしいた。ラジオ・新聞・雑誌の順にとりあげてみたい。

ベルリンオリンピックに参加した五二ヶ国中、三二ヶ国が中継放送を希望し、約八〇人のアナウンサーによって二

五ヶ国語の放送が行われることになった。この希望を実現すべくドイツ側は完璧な放送施設を用意した。メインスタジオムには巨大な送信室が設けられ五〇個のマイクが設置された。またスタジオム内の競技をしながら実況できるような、防音放送ボックスも置かれた。メインスタジオムのみならず、水上競技場など他の競技場にもそれぞれ放送室が設けられ、全ての放送室に設置されたマイクは、三二〇個にのぼった。実際に海外への放送は、ケーブル、短波、録音の三つの形式で行われた。ケーブルでの放送は主にヨーロッパ向けで一八放送行われ、大スタジオム内外に設置されたケーブルの総延長は、七〇〇〇キロに及び、ベルリンからアジス・アベバまでの距離に匹敵するものであった。短波は一〇放送、この短波放送のため、ドイツは従来六台しかなかった四〇キロワットの放送機を、新たに五台設け、五〇キロワットの放送機を二台、さらに一一基のアンテナも新設した。その費用だけで当時の金額にして一〇〇〇万円に相当するといわれた。また録音は四四放送行われ、この録音放送のため固定式で四二個、移動式で二〇個の録音機が配備され、二〇台の録音用自動車まで配備された。

こうした施設を利用して日本への放送は、短波と録音の形で行われた。短波は二つの周波数を使って万全を期し、放送はドイツ方式で一五分钟前から音楽が流され、ドイツ標準時間が知らされ、一分間の沈黙を置いてから開始された。時間帯は、早朝の六時三〇分から三〇分間と、夜の一時から一二時の一時間をあて、八月一日から一六日間放送されたため、日本国民は睡眠不足になったという。競技は生中継による実況と、競技の模様を録音した実感中継の二つの形式をとった。この中継のため東京中央放送局の頼母木真六マネージャー、河西三省、山本照両アナウンサーの三人が派遣された。一方国民の側も、日本選手に期待すると同時に、ラジオの加入者はこの年二四二万から二九〇万世帯に増加、受け手としての準備も整っていたのである。<sup>1)</sup>

ベルリンから生中継で送られてくる日本選手の活躍は、日本国民を熱狂させた。特に女子二〇〇メートル平泳ぎ決勝において、前畑秀子がドイツのゲネンゲルと一騎討ちを演じた様子は河西アナウンサーの「前畑、ガンバレ」の絶

叫によって日本国民を興奮の坩堝にたたきこんだ。競技の開始時間が遅れ、実況終了予定の深夜の一二時を過ぎようとしていたため、まず河西アナウンサーは「……スイッチを切らないでください。もう予定時間ですがスイッチを切らないで待っていて下さい……」と注意をうながした後の放送であっただけに、余計印象的であった。

河西アナウンサーの「前畑、ガンバレ」は実況放送ではなく応援放送だとの批判もあったが、目の前で展開される日本選手の健闘に、思わず力が入り、国民は自らがベルリンのプールサイドにいるような感覚を味わいながら聞いていただけに、「感激した」「熱狂した」との感想が寄せられ、後にレコードとして売り出されたほどであった。

日本放送協会に寄せられた有名人の感想を二、三紹介しよう。「オリンピック放送は確かに世界を狭め、遠いドイツという気持ちより、隣りの国からというような親しい感を与え、なんともいえない平和感を世界に横溢させたと思います。」(山田耕作<sup>1)</sup>作曲家、「正直なところ私はスポーツに就いて何も知りません。勿論、見た事もないのです。従って新聞などがオリムピックをチャン／＼書き立てゝゐるのを何か不愉快にさへ感じてゐた位です。ところがどうした出来心か、ラヂオを聴いたのです。それは村社選手の五千米の時でした。プールも見たことのない私がベルリンのその場所にゐるやうにさへ感じました。アナウンサー氏の実感溢れる巧まぬうまさを賞讃すると共に、その努力に感謝したいと思ひます。この国際放送は、私にスポーツといふものをいろ／＼に感じさせてくれました。ラヂオなればこそです。」(蛭川虎三<sup>2)</sup>後の京都府知事)、「伯林よりのオリムピック放送は大衆に対してラヂオの力を完全に認識させた。伯林よりの放送が無かったならば大衆は、これほどに、オリムピックに熱狂しなかつたらう。然もあのアナウンサーの興奮はまことに効果的であった。アナウンサーによって大衆は興奮に導かれたのである。」(村田 實)<sup>(2)</sup>  
すなわちラヂオによる放送は同時性と共にアナウンスメントの効果によって想像をかきたて、日本選手の活躍に国民のナショナルリズムはいやが上にも高まったのである。

## (2) 新聞

日本は大阪毎日（大毎）・東京日日（東日）新聞の毎日系、朝日新聞・読売新聞・同盟通信社の三新聞社と一通信社がベルリンに向けオリンピック取材陣を編成して派遣した。各紙はそれぞれ取材に秀れ、読ませる記事を書く一流記者を派遣すると同時に、ヨーロッパ各地に設置している支局の特派員を総動員して取材と報道にあたらせた。また各紙とも記者の目でなく、文学者あるいは詩人の目でオリンピックを見てもらおうと、朝日が武者小路実篤、西条八十を特別派遣員としてベルリンに送れば、東日は気鋭の作家横光利一に記事を書かせ、読売は朝日と重複したが西条八十に依頼した。

しかし朝日が掲載した武者小路と西条の報告は、叙情的に描写するばかりで、それを生み出す背景についての考察には至らなかった。横光は開会式での日本選手のだらしなさを指摘するなど、好意的な報道ばかりの中で、やや批判的な論調をほった。朝日は、経費を惜しまず「国際オリンピック電話」と称し、国際オリンピック委員会会長バイエ・ラツール伯から日本からでかけていった応援団長に至るまで、国際電話をつかったインタヴューのコーナーを設け、毎日新鮮味を出そうと努力した。同盟通信社はこの年の一月一日に日刊の新聞各社と放送局の共同出資で設置されたばかりで、報道・宣伝の緊急性、重要性のためにつくられた<sup>(3)</sup>にしては外報局長を外務省から採用したことに示されるように、「報道」に関しては新聞社よりかなり非力であった。

ベルリンオリンピックの新聞報道において電波メディアのラジオに対抗する武器は、電送写真と記録映画であった。聴覚に訴えイメージーションをふくらませるラジオに対抗するには、視覚に訴える写真と映画が必要とされたのである。電送写真については、日本の逓信省とドイツ郵政省の独占事業となり、どの新聞に対しても契約さえしておけば、同じ写真を二種類配給することになっていた。一枚の写真を完全に受像するのに一四分から二〇分、さらに現像・焼き付けに二〇分を要し、約一時間たらずでオリンピック選手の活躍が写真として日本の読者に提供されることになっ

た。電送写真の設備を開設する経費は当時で五万四〇〇〇円、これらの費用は逓信省と日本電機同盟の共同出資で賄われた。送られてくる写真の費用は、一枚につき約一〇〇〇円、使用する一四社で割って一枚七〇円から八〇円入手することができた。したがって各新聞社は画一的になることを恐れて、時間的には少し遅れても特派員の特ダネ写真掲載したり、配給の写真を修正するなど様々な試みが行われた。<sup>(4)</sup>

一方記録映画は大毎・東日対朝日の速報合戦となった。東日はニュース映画専門のバヴァリ社と朝日はウーファース社と契約。そして一刻も早く日本の読者にそれを提供すべく、空輸リレー合戦が始った。八月二日、大毎と朝日は共にモスクワへ定期飛行便で飛び、さらに飛行機を乗り継いで三日、ベルリンを出発したヨーロッパ国際列車を途中でキャッチ。映画のフィルムと特ダネ写真を入れて別々の飛行機で一路日本へと向った。だが悪天候にさえぎられたり、飛行機が故障するなど、様々なトラブルの結果、八月一〇日の朝、朝日は福岡に、大毎は大阪に写真と映画を投函、写真はすぐに焼き付けられ東京に送られて号外となって配られ、結果は朝日の号外が東日よりわずかに早かった。記録映画も一〇日夜にはこぎつけたが、送られてきた映画は朝日はウーファース社の「トーキー映画」と社告を出したが、実は無声映画であった。東日はベルリンで撮られた文字通りのトーキーで、オリンピックの鐘は鳴り、ヒットラーが話す声そのまま伝えられた。朝日対毎日の競争は、朝日が号外で勝ち、毎日系が映画で勝ったという結果に終わった。

新聞社のオリンピック報道は、日本選手の活躍を伝え、感動的な記事にしたため、冷静な筆使いより興奮をもりあげ、また競技が開始される前には、「日本選手有望」「入賞間違いない」など、希望的な記事を多く載せ、外国選手と冷静に比較検討することはなかった。また当時外信部体制が確立しておらず、にわか仕立ての派遣団の実態が暴露され、オリンピックのお祭りの気分、さらにはそれを支えるドイツを好意的にとらえる論調が多く、知らず知らずのうちに日本の読者をドイツの信奉者にかえていったのである。

## (3) 雑誌

ラジオ・新聞と共に国民に大きな影響を与えたメディアは、マスマガジンであった。雑誌の代表は『キング』、『少年倶楽部』、『講談倶楽部』などに代表される講談社の九大雑誌、「おもしろい、安い、ためになる」をキャッチフレーズに売り出された。特に準備に三年の歳月をかけ、創刊二年目にして一五〇万部を突破したといわれる『キング』は、一〇月号、一二月号の二号をオリンピック特集号とした。一〇月号では「伯林オリムピック大会であっばれ殊勲をたてた人々」と題して、五〇〇メートル、一万メートルで長距離王国の三選手を相手に最後まで健闘、四位にくだりながら村社講平、棒高跳びで二、三位を占めた西田修平、大江季雄、三段跳びで世界新記録を記録して金メダルを獲得した田島直人、朝鮮半島から参加、マラソンで一着でゴールインした孫基禎、同じくマラソンで三位になった南昇龍をとりあげ、生い立ち、あるいは隠れた努力などをたたえている。また一二月号では「オリムピックみやげ話持ち寄り会<sup>(5)</sup>」と題しオリムピックから帰国したポートの監督、馬術代表、マラソンコーチ、日本人応援団長、東京女子音楽体操学校長の座談会を開いた。ここでは主に豪華なスタジアムや行きとどいたサービスへの好印象が述べられているが、ヒトラーやナチスについて次のように語っている。

今度の伯林大会が非常に盛会だったというのはこれは独逸政府が国家総動員のいきごみで臨んだからなのです。つまり国家統制のもとに全国民あげてやったわけです。それでもって外国人にヒトラーの威力、つまりヒトラーに対する国民の崇拜の念がいかに強いものであるかを示し、かつ独逸国家というものの好印象を与え、国内的にはオリムピックを利用して国民全般に愛国熱を鼓吹させるという建て前からやったようです。

それで独逸としてはできるだけ多くの種目に優勝して、ナチス国家の威力を内外に示そうというので、全国から各地に散在する各種の運動の強者を無理に伯林に転動させ会社の退け時間も三時なら三時に決めて、その後は専心練習をやらせる。国民体力の向上は独逸興隆の第一歩だといって、国家の命令でやらせたんです。

それで今度の大会で、独逸では軍人や警察官が選手として多数参加していました。

さらに日本人に特別に好意的であったと幾人かは述べる。

マラソンでもドイツ人は皆日本人に応援してくれました。非常に好感を持っているのですね。

日本人の評判は非常に良かったです。ドイツ人は日本人に特別の好意を持っているらしい。そうして日本人はドイツ人の次だと思っている。ドイツ人より偉いとは思わないけれど、「ドイツの次に日本がエライ」というんですからね。

雑誌メディアに関しては直接取材陣を派遣した社は見当らず、新聞やラジオの報道の二次的なものであったり、帰後の談話のような記事が多い。その中でも『文藝春秋』は七月号から九月号にかけて、オリンピックのラジオ報道や新聞報道を鋭く批評していた。ラジオ報道に関しては実況放送がいかに感動的であったかを述べている反面、伝える側のアナウンサーまでが感情的になっていたことが批判され、また新聞報道については各紙の速報競争とオリジナリティについて比較分析されていた<sup>(6)</sup>。そしてさらにはオリンピック東京招致決定に関して、「国威」だとか「勝利」だとか報道されていたことで、スポーツ精神とオリンピックに疑問を抱いたというような文章も掲載していた。『中央公論』には第一二回大会の東京招致の裏話「東京へオリンピックがくるまで」が読者の興味を惹いた<sup>(7)</sup>。

このように見てくると、一般大衆に広く読まれていた『キング』などの雑誌には、「ベルリンオリンピックはいかに素晴しかったか」と「日本選手はどれだけ活躍したか」がクローズアップして書かれ、一方有識者層に読まれていた『文藝春秋』『中央公論』などは、ベルリンオリンピックの舞台裏、日本のメディアのオリンピック報道の批評を意識してとりあげたといえる。それは有識者の中に「このオリンピックの裏には何かあるのではないか」という疑問を抱く者がいるに違いないと編集者が考えたことを示している。

ドイツはオリンピック後もこのベルリン大会を利用した。かねてからナチスの党大会の記録映画の撮影で新機軸をうち出した女流監督レニ・リーフェンシュタールのオリンピック映画『民族の祭典』は、アメリカからやって来た天オアスリート、黒人選手のジェーシー・オーエンスの活躍、マラソンで優勝した孫基禎の苦痛に顔をゆがめながらマ

ラソンに挑んだ力走振り、棒高跳びのメドーズ、西田、大江の息づまる対決など、幅跳びの競技の脇には撮影用のレールを敷き、高飛込みの撮影には水中カメラを持ちこむなど、新しい技術と手法によってスポーツを美にまで高め、また国別に編集をしながら、その国の選手の活躍を伝えるなど、この映画は宣伝臭を除いても記録映画として一級品に値し、人々に感動を与えたのである。

- (1) 日本放送協会編『日本放送史・上』（一九七五年、日本放送出版協会）三〇六ページ。
- (2) 日本放送協会『放送』昭和二十一年一〇月号。
- (3) 前掲報告書三一―ページ。
- (4) 同右書五七―ページ。
- (5) 『キング』昭和二十一年一月号。
- (6) 『文藝春秋』昭和二十一年九月号。
- (7) 『中央公論』昭和二十一年一〇月号。

## 結 び

ベルリンオリンピックは八月一七日の閉会式をもって終わりを告げた。ゲッペルスは日記に次のように記した。

すべてはすばらしく進行した。われわれの客人たちは熱狂している。三時、スタジアム。超満員。街路も。人々の歓声。ドイツは金メダル三三個で断然トップだ。すばらしい。果てしもなく続く表彰式。少しそっけない閉会式。聖火が消えた。鐘が鳴り、旗がおろされた。大会は終わった。総統と一緒に歓呼している人波を通って行く。人の海。祭典の町が別れを告げる。さようなら！<sup>(1)</sup>

ドイツは各競技を通じて選手の活躍により金―三三、銀―二六、銅―三〇、合計得点一八一点をあげ第二位のアメリカ（金―二四、銀―二〇、銅―一二、合計得点二二四）を大きく引き離し圧勝、その力を示した。大会はドイツ選手のみ

が活躍したのではない。出場した四つの種目一〇〇メートル、二〇〇メートル、四〇〇メートルリレー、走り幅跳びでいずれも世界新記録、あるいはタイ記録で優勝したアメリカの黒人選手ジェシー・オーエンス、マラソン優勝の孫基禎など外国人選手も活躍、世界新記録二〇、オリンピック新記録一三五に示される競技のレベルの高さが大会を盛りあげた。だがドイツをはじめ各国のスポーツ記者によってつけられた得点表は、『ナチ・オリンピック』の著者リチャード・マンデルによれば、(1)ナチ・ドイツはアメリカより活躍した、(2)イタリアはフランスより秀れていた、(3)日本はイギリスを圧した、つまりファシストと全体主義は人間のエネルギーをより効果的に発揮させる方法であることを証明したことになった。<sup>(2)</sup>

ドイツは圧勝したが「それ以上に重要なのは多くの外国人が開催国の歓待に気分を良くし、ヒトラー・ドイツでの見聞に感銘を受けて帰国したこと」<sup>(3)</sup>であった。

外国から来た観光客は、「首都で愉快に過しているうちに、新聞で読んだ強制収容所やゲシュタポ本部の地下室がデマのように思われ出した」<sup>(4)</sup>のである。選手、役員などの関係者はもちろん、当時ドイツを訪れた日本人は、表面しか見なかった結果、次のような感想をもらしている。

毎日数十万の観衆を収容したあの会場の全面に一日として一片の紙屑をも見なかったなどむしろ不思議な位である。と云ふのは観衆がその会場を去る場合、ドイツ人は各自に紙屑その他のゴミ類を手を持って出て、出口に設けてある屑函に入れてゐたからである。

独逸の市街に這入って、どこを通っても、掃き清められてある様な感じがするといふことである。裏通りを通って見ても、紙屑一つ転がって居ない。家々の金具は皆んな光って居る。ドアの引手もさうである。住宅の窓のカーテンは、純白で、黒く汚れたのなどを見ないと云ふ。勿論窓ガラスは一つの曇りもない。オリンピック大会では、独逸の選手が揃って純白のユニホームを用いて居たが、これはいふまでもなく、清潔清浄な精神を表徴したものだ。

オリンピック開催中は、「窓へ花を！」というスローガンを用いて、都市美を強調し、列車の沿線は一斉に清掃して、旅行者に

不快の念を抱かじめない様に意を用い、更に外国人に対しての応接、言語、態度に至るまで、いちいちこれを訓示して<sup>(5)</sup>おる。そうしたドイツ礼讃の大合唱の中で、数少ない人々がベルリンオリンピックの本質を見抜いていた。かつて陸上競技の選手であり、慶大医学部卒業後日本陸上競技連盟の役員として、またスポーツ医学のエキスパートとしてベルリンに赴いた浅野均一がその一人であった。浅野は帰国後『文藝春秋』の求めに応じ、「オリンピックで見たナチス」と題する手記を寄稿、次のように指摘した。

ドイツという国でなく、「ナチス」という国へ来たのではないかと思つたくらい、ヒトラーという国へ来たのではないかと思つたくらい、ドイツという言葉より「ナチス」という言葉を、ヒトラーという言葉あまりに聞いたり言ったりしていた。

今度のオリンピックはドイツの政府がやったのでもなく、ドイツのナショナル・オリンピック・コミTEEがやったのでもない。ナチス、ヒトラーがやったのである。それだけに「これでもか」「これでもか」というところが見えて嫌だった。神聖なるべきオリンピックが、スポーツが、ナチの道具になったと思われる事もしばあったけれど、統制のとれて<sup>(6)</sup>いたこと、その統制下に働いていた人々の種類、言いかえれば国家総動員、あらゆる機関を都合よく働かしていたことには驚いた。

ベルリンオリンピックをナチスドイツは一〇〇パーセント利用した。大会に先立って、ドイツはラインラントに軍隊を進駐させた。ラインラントはベルサイユ条約によって非武装地帯となっていたが、その約束を破ったナチスの軍事行動は、オリンピックの興奮の中で黙認され、かき消されてしまったのである。

折から日独間には防共協定の交渉が秘かに進行中であり、ベルリンオリンピックの日本選手団派遣にあたり、日本の大会アタッシェに推薦された大島浩在、ドイツ日本大使館付武官が陰で動いていたのである。

日本は日本選手の好成績、国をあげての興奮を親熱に転化し、また東京で行われる予定の第一二回大会の先例にするという意味からもナチスのプロパガンダに組みこまれてしまったのである。

- (1) 平井正『ゲッベルス・メディア時代の政治宣伝』(中公新書)一九九一年、中央公論社)一七五ページ。  
 (2) リチャード・マンデル、田島直人訳『ナチ・オリンピック』(一九七六年、ベースボール・マガジン社)三四九ページ。

- (3) ジョン・トーランド、永井淳訳『アドルフ・ヒトラー』（上巻）（一九七九年、集英社）四四六ページ。
- (4) ダフ・ハート・デイヴィス、岸本完司訳『ヒトラーへの聖火―ベルリン・オリンピック』（一九八八年、東京書籍）一二六ページ。
- (5) 森崎善一『学べ！ 独逸国民生活』（一九三八年、千峰書房）一二六ページ。
- (6) 浅野均「オリンピックで見たナチス」（『文藝春秋』昭和二十一年二月号）。